



筑紫女学園大学リポジト

ラッセル教育哲学における「知的想像力」の形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000027

ラッセル教育哲学における「知的想像力」の形成

中野桂子

The Formation of “Intellectual Imagination” in Russell’s Educational Philosophy

Keiko NAKANO

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報
第34号
2023年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 34
2023

ラッセル教育哲学における「知的想像力」の形成

中野桂子

The Formation of “Intellectual Imagination” in Russell’s Educational Philosophy

Keiko NAKANO

Abstract

According to Bertrand Russell’s educational research in the welter of conflicting fanaticism, one of the few unifying forces is scientific truthfulness. The habit of careful veracity acquired in the practice of this truthfulness can be extended to the whole sphere of human activity, producing, wherever it exists, a lessening of fanaticism with an increasing capacity of sympathy and mutual understanding.

If scientific truthfulness lessens fanaticism and increases a capacity of sympathy and mutual understanding, can it formed by education. Thus, this paper aims to describe an answer to this question.

As a general rule, scientific truthfulness belongs with reason, and a capacity of sympathy and mutual understanding belongs with feeling. Reason is different with feeling, but it is combined with feeling by imagination. Then, closely parallel to the development of impersonal thought there is the development of impersonal feeling. Therefore, “intellectual imagination” in thought develops “sympathetic imagination.”

In Russell’s educational research, the cultivation of wide sympathy, give the instinctive germ, is mainly an intellectual matter. Wide sympathy is cultivated by intellectual imagination, and the imagination is formed by scientific truthfulness, or the practice of philosophical method as science. Russell describes science as philosophy based on Spinoza’s meta physics leaving science as technique. Here, science means physics mathematics, history, geology, astronomy, and so on. Such a science forms an intellectual imagination and takes us away from the now and here.

Formation of sympathy depends on intellectual imagination, so that universal

sympathy is formed by intellectual imagination of science as philosophy. Universal sympathy is the analogue, in the realm of feeling, of impersonal curiosity in the realm of intellect. Thus, intellectual imagination lessens fanaticism and increases a capacity of sympathy and mutual understanding.

In conclusion, what Russell is saying is that we should cultivate the scientific spirit, and be to put before the pupils the ideal of scientific attitude to practical questions. If full possibilities of science are realized by those who teach it, intellectual imagination can be formed.

Keywords : バートランド・ラッセル (Bertrand Russell)、教育 (education)、知的想像力 (intellectual imagination)、科学 (science)

はじめに

バートランド・ラッセル (Bertrand Russell 1872-1970)、第一次大戦に対する反戦平和運動以来、ラッセル平和財団をつくり、核兵器廃絶を求めてラッセル＝アインシュタイン声明を出し、サルトルらとベトナム戦争犯罪国際法廷を開催するなど、戦争と核兵器反対のあるところにはいつも彼がいた。この運動は97歳に至るまで変わることがなかった。

このラッセルが『西洋哲学史』(1962)のなかでこう語っていた。「さまざまに対立している狂信的態度の渦中であって、統一をもたらそうとする数少ない力の一つは科学的誠実性 (scientific truthfulness) である。」¹⁾「この哲学的方法の実践にあたって獲得された綿密な廉直さの態度は、人間活動の全領域に広がりうるのであって、それがあるところではつねに狂信的態度は減じられ、共感と相互理解の力を生むことができる」²⁾。

いったい、「科学的誠実性」や「この哲学的方法」といったものは何であるか、これがなぜ、「狂信的態度を減じ、共感と相互理解の能力を生む」ことになるのか。そしてこれは教育によって形成可能なことであるのか。本論文はこの問いの答えを明らかにすることにある。

なお、哲学に比べると教育学に関するラッセルの研究論文はきわめて少ない。もともと、ラッセルの探求は、体系化ではなく、洞察の深さによって、問いを生み出すものであった。それゆえ、ウッドがラッセルを評して、「なぜホワイトヘッドがラッセルをしてプラトンの対話そのものと呼んだかが、いまやよりたやすく理解されるであろう」³⁾としたのも正鵠を得ている。哲学と同様に、教育哲学的探求には哲学ないし形而上学的問いが加えられているので、さらに、理解が困難になっている。したがって、ラッセルの教育に関する研究論文は少なく、ラッセル教育哲学を包括的に明らかにしたものはさらに少ない。しかも、「知的想像力」の形成となれば、さらに限定され、これ自体をテーマにした研究はない⁴⁾。本研究は、このような事情を踏まえ、過去のいくつかのラッセル研究に糧を得ながら進められている。

1. 感情と知性の架橋

ラッセルが語る狂信的態度、共感、相互理解は、本来、知性より感情の領域にある。狂信的態度は、狂おしく荒々しい怒りや恐怖の感情である。これが知性の欠如によって生じたとしても、それ自体は感情であって、これはいかなる知的説得をも拒否する。もはや聞く耳をもたないのが狂信的態度である。共感 (Sympathy) は、まさに共にある (Sym) 苦しみ (pathy) ということにおいて感情である。相互理解もまた、他者の気持ちないし感情が分かるということにおいて感情である。他者の感情が分かるとは、その感情を分かちもつということであって、心理分析によって客観化して、それを認知するというのではない。ラッセルは、この感情の問題を科学的誠実性ないし哲学の方法で解決できると見ている。もちろん、ラッセルが「この哲学的方法」というとき、それはラッセル自身がその形成に貢献してきた論理学、厳密には論理実証主義、広義には科学哲学のことを指している。しかし、はたして、これで解決可能であるのか。

人間の基本的感情である怒り、喜び、憎悪、恐怖は感情であり、認知や思考とは違っている。ここには、あたかも音楽と数学のような違いがある。ミズンは、認知考古学の研究において音楽と言語の進化をとらえ、「この点で、言語は根本的に音楽とは違う」⁵⁾と語っていたが、それは諾うことができる。もちろん、こうした感情と知性の対峙は、哲学にもある。かつてエイヤーは、「ラッセルはムーアやヴィトゲンシュタインやカルナップの後継者たちに対するよりも、ロツク、バークリー、ヒューム、ジョン・スチュアート・ミルたちの方にずっと近い」⁶⁾と語っていた。とくに、ラッセルは認識論においても倫理学においてもヒュームに近い。このヒュームは、感情と知性とを対比して、「知性は感情の奴隷であり、ただそうあるべきである」⁷⁾と述べていた。ラッセルは、ヒュームの提言に同意して、『倫理と政治における人間社会』(1954)において次のように語る。「願望、感情、情感といったものが行為を起こしうる唯一の原因である。認知はその原因ではなく調停するものにすぎない。」⁸⁾ここで語られている感情と知性はただ無関係に対峙しているのではなく、目標を選択し、行為を起こす感情に従って感情に都合がよいように調停する働き、いわば目標と手段の関係になっている。感情と知性の関係は、哲学的人間学におけるような精神と衝動との関係ではない。たとえば、シェラーによれば、精神は「待ちこがれている諸衝動の眼前に、あたかも餌のように理念と価値にふさわしい諸表象をおく」⁹⁾のであった。シェラーにおいては、衝動はただ精神に従って働く馬のようであり、精神が御者として衝動の行方を決めるのである。だが、ヒュームとラッセルにおいては、知性は精神の働きをもたず、馬のような力もない。知性の働きは軽い。それはただ目標を滞りなく達成するための合理や効率性の追求となる。したがって、ヒュームによれば「知性は感情を正当化することも非とすることもできない」¹⁰⁾のである。

ところが、ヒュームは次のようにも語っている。「われわれが何らかの仮定の誤りあるいは手段の不十分さに気づく (perceive) やいなや、われわれの感情は反対せずわれわれの知性に服する。」¹¹⁾仮定の誤りや手段の不十分さに気づくのは、われわれが「ある離れた見方、すなわち

内省（reflexion）に基づいている」¹²⁾からである。内省は、よくよく考えてみるということであり、それは熟考ないし熟慮である。したがって、内省には知性の働きがある。このとき知性は力をもったものになっている。それゆえ「われわれの感情は反対せずにわれわれの知性に服する」との命題が成り立つ。したがって、ここでヒュームが語る知性は理知とか理性といったものを含むが、なおそれを越えて、感情を服させる力をもったものになっている。知性は蘇生され活性化された理性というべきものになる。

ヒュームにおいて、内省は、いま・ここから「離れた見方」であるから、それは俯瞰することである。内省や反省は省みるということに他ならないのであり、省みるからには離れて立つことを前提とする。しかも、離れるということは、この場この時から飛翔することである。ヒュームは語る。「記憶、感覚力、そして知力も、それゆえそのすべてが、想像力すなわちわれわれの観念の活性を根底としている」¹³⁾と。かくして、知性を力あるものにするのは想像力である。ヒュームにおいてはこの想像力が感情と知性を包括し、知性を介しあるいは知性そのものとなって感情に働きかける。もっともヒュームは、想像力が何であるかについて語ってはいない。それは、ヒュームにとって「神秘的で説明することのできない何か」¹⁴⁾としか答えようがなかったのである。

全く違ったものと見られていた感情と知性との架橋は、ヒュームにおいては想像力であった。ラッセルの『社会再建の諸原理』（1916）においても、この想像力は教育における重要な概念であって、「直観、想像力、子どもに対する敬意」¹⁵⁾となっている。なお、ラッセルの教育にはヒューム以上にスピノザが大きな意味をもっている。このスピノザはこう語ったことがあった。「或る感情は、それに反対する感情で、しかもそれより強い感情によるのでなければ阻止されたり或いは除去されたりすることはできない」¹⁶⁾と。これによれば、憎しみは愛、悲しみは喜び、不信は信頼、怒りは和解、絶望は希望といったものによってしか、とり除くことができないということである。したがって、スピノザにおいては知性の影は薄い。

ところが、ヒュームと同様に、スピノザにおいても感情と知性との地位が逆転する。「自己の感情を抑制する人間の力は、もっぱら知性にある。」¹⁷⁾「感情にたいして私たちの自由になる抵抗手段としては、感情を真に認識するというこの手段以上に有効なものがあるとは考えられない。」¹⁸⁾なぜなら、「明晰かつ判明な概念を構成しえないような感情は、一つも存在しない」¹⁹⁾のであって、それゆえ、憎しみや狂信、恐怖といえども、知性によって、それらが明晰に判明されるや否や、それは消去される。そのかぎり、知性の認識作用自身もまた感情にならざるをえない。この認識作用は強力であって、ありふれた月並みの認識作用ではない。スピノザは語る。

永遠の相のもとに認識されるものはすべて、精神が眼前にある身体の現実的存在を把握しているから認識されるのではなく、むしろ、精神が身体の本質を、永遠の相のもとに把握していればこそ認識されるのである。²⁰⁾

したがって、感情を認識し、それを消去する知性は「永遠の相のもとに」感情を認識する。現

実的存在と永遠の相とは非連続であって、それゆえ永遠の相のもとに知性は飛翔して、そこから感情を認識する。スピノザは明言してはいないが飛翔は想像するということであり、正確には、それは知性によるわけであるから、知的想像力と解すべきものである。

ラッセルはスピノザを称えて語る。

この永遠の世界にふれること（contact with this eternal world）は、——たとえこれがわれわれの想像の世界であるとしても——われわれのつかのまの生命がもつ闘争や明らかな誤ちによっても完全には破壊されえない力と根本的な平安をもたらす。スピノザが神への知的な愛と呼んだものは、この永遠であるものの幸福な冥想（contemplation）である²¹⁾。

永遠の世界を想像し冥想することは、憎しみやねたみや狂信を浄化する。ラッセルは、『倫理と政治における人間社会』（1954）のなかでこう語る。われわれの社会においても、「易しいとはいえないとしても、知的な確信へ働きかけることと同じように、論議によって感情へ働きかけることはできる。」²²⁾論議を支配するものは主として知性であるが、知性の働きもまた感情になるからである。よって、『追憶の肖像』（1956）は語る。「非個人的（impersonal）な思惟の発展に密接に平行して非個人的な感情の発展がある。これはほとんど同じように重要であり、ひとしく哲学的な見方から導かれるべきものである。」²³⁾ラッセルにおいてこの「非個人的」とは、主観的時間空間を超えたもの、いわば私的欲望や感情を超えていることの謂である。これを可能にするものは知的探求を眼目とする哲学である。哲学は、主観的時間・空間、すなわち「いまとここ」からの飛翔を可能にする。ただし、哲学の探求は「知的想像力」²⁴⁾であるからである。その意味で知的想像力もまた感情にならざるをえない。

2. 科学の形而上学

ラッセルの『意味と真理の探求』（1940）によれば、人間は限られた特定の時間・空間を生きているので、「自己中心的特定体（egocentric particulars）」といえる。この特定体は、「これ、あれ、わたし、あなた、ここ、あそこ、いま、それから、過去、現在、未来」²⁵⁾という言語によって統括されるものである。ラッセルによれば、これを超えさせ、普遍へ至らしめる力は科学である。たとえば、物理学がそれである。ラッセルは語る。「神は時間空間をくまなくながめている、と信じられているかもしれないが、物理学も時間空間をそのようにながめている」²⁶⁾と。「時間空間をくまなく公平にながめている」というのは、人間社会における時間・空間を捨象して、個人的時間・空間から新たな時間空間の世界へ知的想像力を働かせ飛翔するとの謂である。しかも、この飛翔は形而上学へ向かっている。ラッセルは、『意味と真理の探求』の最後の章で語る。「われわれは、この章において、ついにある意味でわれわれの探求のすべての目標といえる結論に達した。その結論は完全な形而上学的不可知論は言語的命題を保持することと相容れないとい

うことである。」²⁷⁾この発言に同意したアインシュタインは、論文「バートランド・ラッセルの知識の理論に関する所見」(1944)において、こう語る。すなわち「これらの努力を見て私は、この著書の最後の章で、人はどうしても『形而上学』なしには前へ進むことができないということが、究極的に明らかにされていることを知って、ひととき喜びを感じている」²⁸⁾と。そして、アインシュタインは最後に「私はここで議を唱えることは唯一つ、行間を通じて煌いている純粹な知的良心 (das schlechte intelleutuelle Gewissen) である」²⁹⁾と記す。これは、ラッセルの知的良心に対する評価である。ラッセルが「科学的誠実性」「この哲学的方法」と称する科学的哲学は、知的誠実性の謂であり、それをアインシュタインは純然たる知的良心と称したのである。良心は力である。したがって、知的良心は知的にも情的にも人間を普遍化する。

ラッセルの師であったホワイトヘッドの『科学と近代世界』(1953)によれば、スピノザとライプニッツ、「この二人は、科学が関係しているかぎり、彼らの哲学的影響においていえば、どちらもかなり孤立している。あたかも、スピノザは思想の古いかたちにもどることによって、またライプニッツは Monad という新奇なものによって、安穩な哲学の圏外にある辺地へさまよい出たかのようである。」³⁰⁾そして、ラッセルはスピノザとライプニッツを評価する。それは二人がデカルト的な科学的唯物論を脱して、形而上学の世界を構想しているからである。なかでも、ラッセルはスピノザの倫理学に多くを学んでいる。このスピノザは語る。「神をのぞいて他には、いかなる実体も存在しえないし、また、考えられもしない。」(定理14)したがって、「すべて存在するところのものは、そのうちに存在しているのであり、神なくしては、何ものも存在しえないし、また、理解されもしない。」(定理 15)³¹⁾これによれば、神は実体即自然・宇宙である。それゆえ、スピノザの形而上学は、シェーラーが述べていたように「無宇宙論的汎神論」³²⁾である。したがって、「神、すなわち、神のあらゆる感情は、永遠である。」(定理19)³³⁾この永遠は無限ということではない。すなわち、「しかし、ここでいう神は、無限であるという意味で考えられるばあいの神ではない。」³⁴⁾スピノザの形而上学は、キリスト教における人格神をもたず、永遠の無時間空間を根本とすることにおいて、色即是空を説く仏教的気圏に近い。

かつて、ランゲフェルドは、「幾世紀もの間、教育問題に対する人間の理論的な関心は、何にもまして大人の社会のための配慮から、市民あるいはよきキリスト教徒の創造という観点から、決定されてきた」³⁵⁾と批判して、子どもを次のように理解すると語っていた。

……ライプニッツのような哲学者たちは、物質、植物、動物、人間をそれぞれ部分として一つの連続的統一を形成しているような整然と一貫した宇宙を考えた。ここではもはや人間と物というデカルトの二元論は受けいれられない。そして一つの哲学的な連続性の理論の中で、子供を動物でもなければ完全な人間でもないような一個の独自の存在として、哲学的に理解する……³⁶⁾

これらの「哲学者たち」のなかにスピノザも加えることができる。このスピノザも世界を連続

している統一体として理解したのであり、そのなかに子どもも動物も含まれる。これらは、神即自然であることにおいて、いずれも永遠である神の属性である。それゆえ、ラッセルが「生きているもののすべてに、しかもとりわけ人間に、そしてそのなかでも子どもに、神聖な、名状しがたい、無限の何ものか、独自かつ不可思議な高貴あるもの、生命の成長原理、世界の黙々たる努力が具体化された断片というものを感じる」³⁷⁾としたのも諾うことができる。ここで「生きているもののすべてに」とあるので、動物もそうである。したがって、ラッセルは、「人間の利益が、動物自身の利益よりも格段に重要だとみなすに足る客観的理由は、何一つない。動物がわれわれを滅ぼしうるよりも一段と容易に、われわれは彼らを滅ぼしうる。これがわれわれの優越性の唯一の実質的根拠である」³⁸⁾とする。それゆえ、『教育論』(1926)において、「子どもには生命の尊重を教えなければならない。あなたが動物、たとえスズメバチでもヘビでも殺しているところを見せてはいけない」³⁹⁾と記されたのであった。

アインシュタインは、「真の問題は物理学がある種の形而上学であるということです」⁴⁰⁾と語る。この形而上学はスピノザのそれである。すなわち、「私はすべての存在の調和に顕現するスピノザの神を信じ、人間の運命や行為に関与する神を信じない」⁴¹⁾とある。それゆえ、アインシュタインの物理学はスピノザの形而上学に鼓舞され、そこから知的想像力を得ている。これによってアインシュタインは、いまだ明らかにされていない宇宙の統一場を探求したのである。ラッセルもまた、スピノザの形而上学に支えられている。ただ、アインシュタインが知的想像力を宇宙へ飛翔させ、スピノザが示す宇宙(コスモス)を理解しようとしたのに対して、ラッセルはスピノザの宇宙へ知的想像力を飛翔し、それにふれることによって、それを人類にもたらそうとしている。これは人類の生存のための闘いとなる。ちなみに、ルイスはラッセルの闘いについて、こう語ったことがある。

戦争、原子爆弾等々のような問題に関して、かれは雄弁にかれとともに信じ、かれとともに行動するようにわれわれのすべてに力説する。この倫理的情熱の背後には明らかに人道主義的な諸目的は万人にとって客観的に正しく、真理であるという確信が存在する。⁴²⁾

この確信は、スピノザに由来している。このことをブラックウェルは、「ラッセルが激しく求めてやまなかったことは、人間生活を耐えさせる哲学を発見することであった。彼はこの努力をスピノザの基本的な倫理概念と結びつけていた。」⁴³⁾と見ている。かくして、ラッセルが語る科学はスピノザの形而上学を支えられており、それによって知的想像力が飛翔し、自己中心的特定体である個人のいまとここが超えられることになる。

3. 哲学としての科学

ラッセルの『懐疑論集』(1935)は語る。「科学は、それ自身の問題によって哲学に関心をもた

ざるをえなくなっている。このことは、とくに相対性の理論が時間と空間とを出来事の単一的空
時秩序の中に消滅させたことにおいていえる。」⁴⁴⁾本来、哲学の主要なテーマであった時間と空
間とが物理学の領域で探求されるに及んで、哲学と物理学は古代ギリシアの自然哲学とは違った
意味で結びつく。また、時間空間と同様、物質という概念は哲学の本質的課題であったが、これ
も量子力学の発見によって、物理学と哲学とを親近なものにした。ラッセルには現代物理学の発
見が、むしろ物理学を哲学へ向かわしめているというのである。

ラッセルによれば、これら物理学の発見によって形成されている科学は、知的想像力によるも
のであり、しかもそれ自身が知的想像力を喚起する。ラッセルは語る。「想像力によってのみ、
人間は世界がかくあるかもしれないということを知るようになる。想像力がなければ、『進歩』
は機械のような、つまらぬものになる。なお、科学も想像力を喚起することができる。」⁴⁵⁾もち
ろん、科学は物理学だけではない。「歴史学と地質学はわれわれを『いま』から連れ去り、天文
学は『ここ』から連れ去る」⁴⁶⁾さらに、「私が数学や科学について学んだことは極めて有益であつ
たばかりでなく冥想 (contemplation) と内省 (reflection) の主題を与えた。」⁴⁷⁾ともいう。ここ
で数学が取りあげられているが、これには論理学が加えられるであろう。歴史学や地質学及び天
文学がそれぞれ時間と空間へ想像力を解き放つものに対して、数学や論理学は時間空間を超えたも
の、いわば無時間空間へ想像力を飛翔させる。それゆえ、これは冥想ないし内省へ至る。スピ
ノザの「永遠の相のもとに」とは、このような無時間空間としての冥想ないし内省の謂である。ラッ
セルのスピノザ解釈によれば、「生起するもののすべては、神がかく見ているように、永遠の無
時間的世界の一部である。」それゆえ、「賢者は人間の有限性が許すかぎり、神が見ているままの
世界を永遠の相 (sub specie æternitatis) のもとに見る努力をする」⁴⁸⁾。かくして、科学の知的
想像力が自己中心的特定体としての個人を、いまとここから連れ去り、永遠の相のもとへ飛翔さ
せ、ひるがえって、いまとここを認識させる。この認識において、狂信的態度、憎悪、恐怖は
明晰に判明され、浄化され、純化されるのである。

もちろん、想像力を育むものは科学だけではなく、文学や芸術にもある。ラッセルは『神秘主
義と論理』(1927)で語る。「科学を教える人びとが科学の可能性を十分に理解しているならば、
最高の精神的卓越性といえる心の習慣をつくり出す力が……ギリシア・ラテン文学と同じくらい
にある。」⁴⁹⁾ラッセルは、文学とりわけギリシア・ラテンの古典文学を評価している。これらも
また想像力を喚起して、われわれをいまとここから連れ去るからである。しかし、現代、唯物論
的力学としての科学が巨大化して、人類の生存にまで脅威を及ぼしている状況において、それは
科学そのものによって解かれねばならないというのがラッセルの真意であった。その科学が形而
上学に支えられた科学である。ラッセルは語る。「科学は、遠方にいる人びとの生命に対する影
響力を非常に拡大したのであるが、彼らに対する共感を拡大させはしなかった。」⁵⁰⁾この巨大な
威力をもつ科学は、「技術としての科学 (science as technique)」であり、かつそれに対抗する科
学は「哲学としての科学 (science as philosophy)」⁵¹⁾である。ラッセルの場合、哲学としての科
学は、デカルトではなく、スピノザの形而上学を支えられており、そうであるため、知的想像力

を飛翔させ、われわれをいまとここから連れ去るのである。

4. 知的想像力の極致

ラッセルは語る。「科学的な精神態度とは知る願望のためにほかのあらゆる願望を一掃すること——希望、恐怖、愛や憎しみ、そして主観的な感情全体を抑制することを意味する。」⁵²⁾ 純粋な知的探求は、主観的な感情の外にある。それだけではなく、知的想像力を喚起して、主観的感情にも及び、それを明晰に判明する。かくして、それは感情に働きかけて、感情を浄化する。狂信や憎悪や恐怖は、ただ抑制されるだけではなく、消去されることになる。それゆえ、哲学としての科学は、知的想像力を喚起する科学である。ラッセルが『西洋哲学史』において、「それがあるところでは、つねに狂信的態度は減じられ、共感と相互理解の力を生むことができる」としたのは、その謂である。

しかしながら、狂信的態度は憎悪や恐怖と等しく主観的感情であり、それは知的想像力によって消去・浄化されるとしても、共感や相互理解の力はどのようにして生まれるのか。いったい、ラッセルが語る共感や相互理解は何を意味しているのか。イギリス経験論の哲学、たとえばアダム・スミスは『道徳感情論』（1759）のなかで、共感について、こう語ったことがあった。

われわれは他の人びとが何を感じているかについて直接の経験をもたないので、彼らが感動するやり方について、観念を形成することができない。それができるのは同じような立場でわれわれ自身が何を感じるかを思い浮かべるときだけである⁵³⁾。

すなわち、スミスは「想像力によって、われわれ自身を他人の立場」におき、「その人の感情と全く異なっていない感情を感じさえする」⁵⁴⁾という。それゆえ、「人は彼の共感が基礎づけられている立場の想像的転換（the imaginary change of situation）をできるかぎり完全に行なうように努力しなければならない」⁵⁵⁾のである。

スミスは、社会のなかで、一人ひとりの個人が他者の感情をくみとり、結びつく方法として、「立場の想像的転換」を語ったのである。これに対して、ラッセルの共感には、具体的な個人が想定されていない。ラッセルはこう語っている。「第一に、苦しんでいる人が特別の愛情の対象でないときにも共感することができる。第二に、苦しみが現に感じられなくとも、それが今起きていると知るだけで共感することができる」⁵⁶⁾。第二の場合の共感は、「遠方にいる人びと」で、自分と何の関係もない、見知らぬ人びとへの共感である。したがって、これは全人類への共感である。しかも、今起きていると知るだけではなく、これからも起こりうるであろうと思われる人類の苦しみへの共感である。技術としての科学は、「遠方にいる人びとの生命」を絶滅しうるだけの力をもっているが、「この人びとに対する共感を拡大させはしなかった。」これを拡大するのは哲学としての科学である。ラッセルによれば、これは哲学としての科学が喚起する知的想像

力であり、この科学が触発する「共感的想像力 (sympathetic imagination)」⁵⁷⁾である。そして、共感的想像力は「普遍的共感」に至る。ラッセルは『権力』(1938)において語る。「この普遍的共感 (universal sympathy) は、知性の領域での非個人的な好奇心を、感情の領域へ移したことと同じである。」⁵⁸⁾

この「普遍的共感」は、スミスがいう「立場の想像的転換」による共感ではない。「普遍的共感」はほとんど知性によるもので、これは「抽象的共感 (abstract sympathy)」⁵⁹⁾である。純粹に知的な探求、すなわち哲学としての科学は、たんに狂信や憎悪や恐怖を浄化するだけでない、「感情の普遍化」⁶⁰⁾を進めて「普遍的共感」を生む。したがって、ここには個々の人間はいない。永遠の相のもとに見られた全人類がある。しかし、全人類は、個々の具体的人間を排除してはいない。これもまた人類であるからである。それゆえ、ラッセルは「仏陀は、たったひとりの人でも苦しんでいる人がいるかぎり、私は幸せであることはできないと説いたといわれている」⁶¹⁾として、仏陀を称える。

スピノザが語っていたように、永遠は時間の無限ということではない。ラッセルはスピノザの永遠を「無時間的世界」と解していた。ちなみに、ラッセルの弟子であったヴィトゲンシュタインは、このことを的確に語っている。すなわち、「もし、永遠が無限の時間 (unendliche Zeitdauer) ではなく、無時間 (Unzeitlichkeit) であると解されるなら、永遠は現在に生きる者にある。」⁶²⁾同様に、ラッセルは語る。「過去と未来との間に感じられる質の相違は、内在的な相違ではなく、われわれに対する関係においての相違にすぎない。偏見なく思索をすれば、この相違は消えてなくなる。」⁶³⁾ラッセルによれば、時間は実際の欲望によって生まれるのであって、そのために時間が重要と見られるのである。かくして、ラッセルは『変わりゆく世界のための新しい希望』(1951)で語る。

スピノザ、自分自身の知恵に従ってひたすら生きてきた最高の賢者のひとりが、人びとに忠告して「過ぎ行くものを永遠の相のもとに見よ」(view passing events 'under the aspect of eternity') といったことを……思い起こすべきである。⁶⁴⁾

この永遠の相のもとに生きる者は現在に生きる。これは、狂信や憎悪や恐怖を浄化し、さらに全人類への共感へと拡大する。なぜなら、永遠の相のもとに過ぎ行くものを見る者にとって全人類は自己と連続していることを知るからである。それは、あたかも一つひとつの波はそれぞれ違っている、大海の一現象であり、それが根底においてひとつであることを抱握するからである。

ラッセルのスピノザの形而上学は、哲学としての科学をして現在に生かしめることを説く。ラッセルは『自伝』(1957)で語る。「私の人生を支配してきたのは、単純であるが、きわめて強い三つの情熱——愛への渴望、知の探求、そして人類の苦しみについての耐え難い思いであった。」⁶⁵⁾この三つの情熱は、現在に生きる者に収斂され、実現されねばならない。かくして、ラッセルの哲学的知性は、スピノザの倫理学に支えられて、反戦・平和、核兵器廃絶の運動に具体化される。

ちなみに、ラッセルは89歳のとき、核兵器に反対して、イギリス国防省の前に坐りこみデモを行い、逮捕、禁固刑に服する。この運動は97歳の死の直前まで続けられている。ジャガーが、このようなラッセルを評して、「予言者や説教者に近い」⁶⁶⁾としたのも諾うことができる。

ラッセルが語る知的想像力は、いまとこことを超えて、非個人的 (impersonal) なものへ向かう働きを意味する。したがって、これは自己中心の特定体と称される個人の自己拡大である。ブラックウェルは、それを「非個人的な自己拡大 (impersonal self-enlargement)」⁶⁷⁾と称したが、それは的確な表現といえる。知的探求は感情にも働きかけ、非個人的な拡大を進めるのである。

むすび

ラッセルは、その哲学思想において子どもの教育を論じてきた。これは、『社会再建の諸原理』(1916)にも見ることができる。1927年には学校を設立し、自らその教育に当たっている。教育は、ラッセルにとって重要なテーマであった。もちろん、ラッセルにとって教育の究極の目標は、非個人的自己拡大であり、それは主として知性の教育によって達成されるべきものであった。したがって、知性の教育は道徳教育にも関わっている。なぜなら、知性の領域において非個人的な関心を拡大するならば、感情をも非個人的にするからである。

ラッセルによれば、「道徳教育 (moral education) は、子どもが6歳になるまでにほとんど完成されていないなければならない」⁶⁸⁾のであった。ここでラッセルが語る道徳教育は、性格の形成の謂である。すなわち、「正しく指導されるならば、性格の形成 (the building up of character) は6歳までにほとんど完成されるはずである」⁶⁹⁾とされる。したがって、6歳以降は道徳教育は必要ではないことになる。ラッセルは語る。「子どもたちが6歳になるまでに正しくとりあつかわれていれば、学校当局は純粋に知的な進歩に力点をおき、これによって、なお望ましい性格の向後の発展を生むようにするのが最もよい、と私は確信する。」⁷⁰⁾したがって、「道徳的諸問題に多くの時間と考慮をついやす必要はない。求められているようなさらなる諸徳は純粋に知的な訓練 (purely intellectual training) から自然に生まれるからである。」⁷¹⁾ちなみに、ラッセルは、1927年自ら寄宿制の学校 (ビーコン・ヒル・スクール) を設立して、4歳から12歳くらいの子どもの教育に当たったが、ここには道徳教育なるものはない⁷²⁾。道徳問題に関するいじめや暴力は、子どもたちが運営する学校審議会において自主、自治、民主的に解決されるようになっている。

ラッセルによれば、「大きくなってから道徳教育 (moral training) が大きく必要とされるのは、小さいときにそれが放置されていたか、悪かった場合にかざられている。」⁷³⁾このような子どもには、6歳以前の性格形成、すなわち道徳教育は困難であり、それはかえって抑圧となって望ましい結果を生むことはない。ラッセルはここで、道徳教育 (moral education) を道徳教育 (moral training) に言い代えている。大きくなってからの道徳教育は道徳訓練である。訓練は知的な活動であるので、道徳訓練は知的な活動となる。したがって、学校では、道徳的諸問題は純粋な知的な訓練によって解かれるはずのものである。この訓練の基幹となるものは、科学的知性である。

かくして、ラッセルは語る。「私が言っているのは、科学的な精神を育てるべきであるということにつきる。」⁷⁴⁾したがって、「しなければならないことは、実践的な問題に対して科学的な態度をとるという理想を生徒たちに示すことである。」⁷⁵⁾この科学的態度は、哲学としての科学に支えられており、そうであるかぎり、知的想像力を喚起し、児童・生徒の憎しみや恐怖やねたみを清浄化し、共感に至ることができる。

ラッセルによれば、「現代の世界はもっと想像力に富んだ共感」⁷⁶⁾を必要としている。「科学を教える人びとが科学の可能性を十分に理解しているならば」⁷⁷⁾、すなわち「教師が科学の可能性を十分に理解しているならば」⁷⁸⁾ラッセルにとって、これは容易ではないとしても教育可能なことであった。

注 (引用文献)

- 1) B. Russell, *History of Western Philosophy*, Allen & Unwin, London, 1962, p.789.
- 2) B. Russell, *ibid.*, p.789.
- 3) B. Russell, *My Philosophical Development*, Allen & Unwin, London, 1959, p.269.
- 4) ラッセルの教育学研究の主要な著書は次の二著があるが、いずれにも知的想像力の探求はない。
J. Park, *Bertrand Russell on Education*, Allen & Unwin, 1964.
高田熱美『ラッセル教育思想研究』創言社、1983年。
- 5) S. ミズン『歌うネアンデルタール』熊谷淳子訳、早川書房、2006年、38頁。
- 6) A. J. Ayer, *Bertrand Russell*, The Viking Press, New York, 1972, p.70.
- 7) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Reprinted from original Edition, in Three Volumes, Ed by L. A. Selby-Biggie, M. A., Oxford, at the Clarendon Press, 1928, p.415.
- 8) B. Russell, *Human Society in Ethics and Politics*, Allen & Unwin, London, 1954, p.8.
- 9) M. Scheler, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, Nymphenbunger Verlagshandlung, München, 1949, p.62.
- 10) D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, *op. cit.*, p.416.
- 11) D. Hume, *ibid.*, p.416.
- 12) D. Hume, *ibid.*, p.583.
- 13) D. Hume, *ibid.*, p.256.
- 14) D. Hume, *ibid.*, p.255.
- 15) B. Russell, *Principles of Social Reconstruction*, Allen & Unwin, London, 1930, p.75. 1st ed., 1916.
- 16) B. de スピノザ『倫理学』高桑純夫訳、河出書房新社、世界の大思想9、1966年、175頁。
- 17) B. de スピノザ、同上書、261頁。
- 18) B. de スピノザ、同上書、238頁。
- 19) B. de スピノザ、同上書、237頁。

- 20) B. de スピノザ、同上書、252頁。
- 21) B. Russell, *History of Western Philosophy*, op. cit., p.560.
- 22) B. Russell, *Human Society in Ethics and Politics*, op. cit., p.88.
- 23) B. Russell, *Portraits from Memory and other Essays*, Allen & Unwin, London, 1956, pp.167-168.
- 24) B. Russell, *ibid.*, p.165.
- 25) B. Russell, *An Inquiry into Meaning and Truth*, Allen & Unwin, London, 1966, p.108. 1st ed., 1940.
- 26) B. Russell, *ibid.*, p.108.
- 27) B. Russell, *ibid.*, p.347.
- 28) A. Einstein, *Bemerkungen zu Bertrand Russells Erkenntnistheorie*, In: P. A. Schilpp, ed., *The Philosophy of Bertrand Russell*, Tudor Publishing Co., New York, 1972, p.290.
- 29) A. Einstein, *ibid.*, p.290.
- 30) A. N. Whitehead, *Science and Modern World*, Cambridge, 1953, p.177.
- 31) B. de スピノザ、前掲書、18-19頁。
- 32) M. シェーラー 『シェーラー著作集13』 飯島宗享・小倉志祥・吉沢伝三郎編、白水社、1977年、270頁。
- 33) B. de スピノザ、前掲書、27頁。
- 34) B. de スピノザ、同上書、256頁。
- 35) M. J. ランゲフェルド 『教育の人間学的考察』 和田修二訳、未来社、1966、20頁。
- 36) M. J. ランゲフェルド、同上書、22頁。
- 37) B. Russell, *Principles of Social Reconstruction*, op. cit., p.147.
- 38) B. ラッセル 『人生についての断章』 中野好之・太田喜一郎訳、みすず書房、1979年、164頁。
- 39) B. Russell, *On Education, Especially in Early Childhood*, Unwin Books, London, 1973, p.96. 1st ed., 1926.
- 40) A. Fine, *The Shaky Game*, The University of Chicago Press, 1996, p.125.
- 41) A. Einstein, *New York Times*, 25 April, 1921. 金子務 『アインシュタイン・ショック』 河出書房新社、1981、206頁。
- 42) J. ルイス 『バートランド・ラッセル』 中尾隆司訳、ミネルヴァ書房、1971年、114頁。
- 43) K. Blackwell, *The Spinozistic Ethics of Bertrand Russell*, Allen & Unwin, London, 1985, p.vii.
- 44) B. Russell, *Sceptical Essays*, Allen & Unwin, London, 1952, p.41. 1st ed., 1935.
- 45) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.20.
- 46) B. Russell, *Portraits from Memory and other Essays*, op. cit., p.166.
- 47) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.20.
- 48) B. Russell, *History of Western Philosophy*, op. cit., p.556.
- 49) B. Russell, *Mysticism and Logic and Other Essays*, Unwin Books, London, 1967, p.32. 1st ed., 1927.
- 50) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.31.

- 51) B. Russell, *The Impact of Science on Society*, Unwin Books, London, 1962, p.22. 1st ed., 1946.
- 52) B. Russell, *Mysticism and Logic and Other Essays*, op. cit., p.38.
- 53) A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, The 8th, printed for A. Strahan, and T. Carell jun. and W. Davis, in the Strand, London, 1797, Vol.I, p.2. 1st ed., 1759.
- 54) A. Smith, *ibid.*, p.3.
- 55) A. Smith, *ibid.*, p.38.
- 56) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.40.
- 57) B. Russell, *Portraits from Memory and Other Essays*, op. cit., p.169.
- 58) B. Russell, *Power*, Allen and Unwin, 1957, p.260. 1st ed., 1938.
- 59) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.40.
- 60) B. Russell, *Portraits from Memory and other Essays*, op. cit., p.168.
- 61) B. Russell, *ibid.*, p.168.
- 62) L. Wittgenstein, *Tractatus Logico-philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, London, 1961, 6-4311. 1st ed., 1921.
- 63) B. Russell, *Mysticism and Logic and Other Essays*, op. cit., p.23.
- 64) B. Russell, *New Hopes for a Changing World*, Allen & Unwin, London, 1968, p.189. 1st ed., 1951.
- 65) B. Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell (1872-1914)*, Allen & Unwin, London, 1957, p.13.
- 66) R. Jager, *The Development of Bertrand Russell's Philosophy*, Allen & Unwin, London, 1972, p.459.
- 67) K. Blackwell, *The Spinozistic Ethics of Bertrand Russell*, op. cit., p.129.
- 68) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.56.
- 69) B. Russell, *ibid.*, p.131.
- 70) B. Russell, *ibid.*, p.131.
- 71) B. Russell, *ibid.*, p.131.
- 72) ビーコン・ヒル・スクールについては、下記の書物を参考になっている。
 B. Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell (1914-1944)*, Allen & Unwin, London, 1968.
 K. テート『最愛の人——わが父ラッセル』巻正平訳、社会思想社、1976年。
 D. ラッセル『タマリスクの木——ドラ・ラッセルの自叙伝』山内碧訳、リプロポート、1984年。
- 73) B. Russell, *On Education*, op. cit., p.56.
- 74) B. Russell, *ibid.*, p.155.
- 75) B. Russell, *ibid.*, p.153.
- 76) B. Russell, *ibid.*, p.32.
- 77) B. Russell, *Mysticism and Logic and Other Essays*, op. cit., p.32.
- 78) B. Russell, *ibid.*, p.32.

(なかの けいこ：初等教育・保育専攻 准教授)